

共<sup>とも</sup>に生きてきた存在ですからね。

では、ウイルスはなぜ存在するのか。あらゆる生命体に役割はそれなりにある。コロナウイルスが現れたときに「ウイルスの完全制圧を」「ゼロコロナ対策を」といった風潮が強いなか、新聞などで求められたコメントに「ウイルスの完全制圧やゼロコロナ政策はやがて破綻<sup>はたん</sup>します」と答えた。なぜ、そう答えたか。ある意味で、人間の「友達」でもあるからです。人間と

ウイルスを失って平衡が乱れることがあるのです。

学生時代を過ごした京都はとても懐かしく、今朝も宿舍から比叡山や東山の山並みが見渡せて感慨を新たにしました。私は、生物学者として、「生命とは何か」をずっと考えてきており、本日は「命<sup>いのち</sup>はどういう物なのか」「生命をどう考えたらいいのか」を話したいと思います。

キーワードは「動的平衡<sup>どうてきへいこう</sup>」です。動的平衡は、私が研究の中で発見した言葉であり、この言葉の意味を明らかにする形で進めていきます。この暁天講座もコロナ禍と重なってしまい、本日ようやく、皆さんとお会いできた次第です。コロナ禍って何だったのでしょうか。動的平衡の観点から考えるとわかることがあります。2020（令和2）年の春先に日本へコロナウイルスが現れたときに日本人の多くもパニックになった。どんな凶悪な病原体が発生し人類に襲い掛かってきたのか、と。しかし、コロナウイルスは異星人でもないし、急に現れた物でもありません。地球に生命が誕生して38億年ですが、その昔からウイルスは居ました。絶えず、姿や形を変え、他の生物の間を往き来して、ウイルスと生物はいわば共生していました。時々バランスを失って平衡が乱れることがあるのです。

## ●ウイルスには情報共有のための横糸を渡す働きがある

講話

# 生命を捉えなおす

どうてきへいこう  
～動的平衡の視点から

生物学者／作家 福岡伸一

7月21日に知恩院で開かれた「暁天講座」の要旨を採録しました。



福岡伸一（ふくおか しんいち）

1959（昭和34）年、東京都生まれ。京都大学卒業。分子生物学専攻。米国ハーバード大学フェロー、京都大学大学院助教授などを経て2004（平成16）年から青山学院大学教授。米国ロックフェラー大学客員研究員。著書『生物と無生物のあいだ』（講談社現代新書）で2007（平成19）年サントリー学芸賞、中央公論新社新書大賞を受賞。他に『福岡伸一、西田哲学を読む 生命をめぐる思索の旅』（小学館新書）、『迷走生活の方法』（文藝春秋）、『ポストコロナの生命科学』（集英社新書）、『ゆく川の流れは、動的平衡』（朝日新聞出版）、訳書に『ドリトル先生航海記』（新潮文庫）など多数。